



昭和49年(1974年) 8月号(No. 350) 社団法人 日本山岳会 (J. A. C.)

定価一部 100円

目次

本文・行事

- 第2回山岳史懇談会 「一高旅行部の足跡」 油谷次康(1) ヒマラヤ輸送必読 中村 進(2) 山下一夫氏遺作展二つ 今井雄二(3) 上高地の山岳研究所を訪ねて 坂倉登喜子(3) UIAA総会に出席して ① 鈴木郭之(4) 山岳書の出版について 原 真(5) ジャコ・ギャルモの蔵書票 雁部貞夫(5) 飯森山 望月達夫(5) 海外からのたより ジャスー登頂(二信) 橋村一豊(6) 図書紹介 山の心 島田 巽(6) 踏 跡(第四号) 織内信彦(7) お知らせ 追憶集「松方三郎」の出版(7)

2 岳談 第山懇

一高旅行部の足跡

昨年の三枝守博名誉会員による第一回につき三月十三日夜、表記のテーマで日高信六郎、大木操、中塚癸巳男の三氏をお招きしてお話をうかがうこととなった。三氏はそろって八十歳を越える高齢にもかかわらずご快諾され、主催者の図書委員会をはじめ心からお礼申しあげたい。

当夜は四十名を越す盛況で、八十三歳の大先輩名誉会員辻村太郎先生がお元氣な顔をおみせになり、楽しんでおられた。

第一高等学校旅行部は、日本山岳会のメンバーによる中部山岳部の探検的登山が一段落し、明治から大正にかけての雪と岩の開拓へ引きつづくべくつぎつぎと誕生した学校山岳部のひとつとして、明治四十四年大木氏らによって創立され、大正三年旅行部に組織発足以来戦後の東大スキー山岳部へつながらる伝統を有している。中塚氏および本会名誉会員日高氏は旅行部の初代委員長である。

司会の山崎安治氏の気楽な昔ばなしをとの要望について、藤島敏男氏から日高さんはともかく、珍らしい方がみえてくれるので三先輩の紹介が一高にまざれこんだ縁で、例のごとく軽妙な調子で行なわれた。

松本駅前まで泊り、ゴザを買ひビーボ1馬車で島々で清水屋に嘉治治の息子の嘉代吉って人に芥川が槍ヶ岳へ連れていってつれてゆかれたので、私は童介といったスケッチブックどころではなく、へたばかりかえって、徳本峠でみた種高、こりや素晴らしい処があるんだわいと山のとりこになったのです。

おやじの小屋で休んで二十匹ほどつがって、初めに岩魚をたべました。河童橋から上は橋ひとつなし、十数へん渡渉しました。東京の子だから初めてでして、背の低いのがいて濡らした腹巻の旅費のお札を河原の石の上に並べて小石のせ、乾くのを待って登ったのが今だに姿に残っています。

坊主の岩小屋の中はカラカラに乾いていて雪が少なかったから八月だと思えます。寒くなく眠って翌朝初めて雲の海をみてびびりしやいました。芥川が元気で、人に和服をすすめて自分はお母さんに、いわれて中学の制服

なにを話しましょうか、私は東京生れでござんして錦糸堀の東京府第三中学(現両国高校)で芥川童之介と一緒にして、芥川は早熟な文学青年で難い本を読んではいまして小島鳥水の「山水無層巖」の「梓川のほとりに立ちて穂高山を眺めるの記」かなんか読んできかせたり、槍ヶ岳の頂上はなんでも四坪八帖敷、この部屋と同じなんだからぜひ行こうじゃないかと誘われたのが明治四十二年。志賀重昂先生の「日本風景論」のあんなに細の着物がよ

上高地の清水屋へ下山、穂高へ行く元氣は誰もなく翌日焼岳へ登り、まだ明治だから大正池はなく、田代池はありまして徳本峠を越えて帰りました。あくまで年御岳へ登り、一高へ入ったら日高さんと会い一緒にの部屋で山岳を本箱にいっぱい持っているの君も山が好きですかというわけで、大木さんが一高山岳会を作ったとき槍ヶ岳へいった奴をひっぱりこめというのでご縁

ができました。卒業名簿を作るのも、入ったと出た順序がまちまちだから入学年年度で作るくらいでして、藤島さんよりずっと早く学校に入って出たのは一緒だそう学校と山と両方が好きだったのしょう。まあこんな処でよろしいでしょう。

次に一高旅行部創立者の一人、昨年十二月で、三日以上生きると望みを達し、今の勢いなら百歳までと目から語られる最年長の太木氏は、戦後は東京都副知事もされたそうで雄渾な風貌で力強く語られた。剣の三の窓の初登者である。

終ったんですが、その時の写真がござい
ます。ガラスの種板を人夫にかつが
せて十何人の大旅行をしたんです。い
まおみせしているアルバムや記録は衆
議院の地下室へ入れておいたので残っ
たのですが、紀行文をおいた万朝報と
時事新報へ夏の休みに二十三回にわた
って連載して、ここに切抜帖もありま
す。

山岳会の有志の集りだけで一夏過し
槍穂高をやってからその秋帝大へ入っ
てしまったので、そのあとを旅行部を
校友会の一部にしようと思力を入れて
本日に日高君などの手でできたもので、
私と守島が旅行部以前のいわゆる
イザナギ、イザナミといわれている
今日でも守島がおれば非常に話が面白
いと思うが三年前に亡くなって残念に
耐えません。

三の窓の話は大正三年一人て夫二人
人を連れて冷沢から鹿島槍、五竜、八
峰のキレットのまだ何も無い処を通っ
て大黒鉱山、祖母谷、鐘釣へ泊って小
黒部鉱山から池の平、剣沢から三の窓
をきわめて剣への新コースと思つた
のですが窓へついたらひどい風と飛雪で
名刺を埋めて引返しんで新記録でも
何でもないんです。

先輩のお話をうかがうために日本山
岳会へ入ったが、会員番号は三一九だ
そうで山歩きは大正三年までで家庭の
事情で在学中に結婚し、卒業時は手持
ちでしたよ。学生結婚のはしりて、以
後役人になったりして山歩きも山岳会
の徽章と共に消え失せてしまったとい
うわけで、ある程度は「一高旅行部五
十年」と「失いし山仲間」という本に
多少かいてありますし、全く草
創時代の証人というわけなんです。

田舎の福岡のただ一軒の本屋をみて
ますと変な雑誌をみつけ、山岳の二年

三号だったか一冊三十五銭で、入金金
は不要会費は一年一円で三冊であるの
で差引動定は得だからハガキで申しこ
んだらたちまち入会しました。紹介者も
何もいりません。と、近年まで山歩き
を続けられた温顔の日高氏はたんと
と語られる。

日本山岳会入会は中学二年で一四二
番と早熟の見本だそうである。東京に
出てきて、守嶋伍郎君は中学からずつ
と一緒で同じ部屋には丸木砂土(秦豊
吉)倉田百三がいました。菊地寛、久
米正雄などは大木さんと同室です。一
年の九月に演習が三日間ありまして鉄
砲かついで、二日目は空砲を撃つたり、
二日目は骨休めといって丸休み、三日
目は戦って帰ってくる。宇都宮の郊外
ですから二日目は前の晩から一日空い
ている。汽車で日光へ、夜通し歩いて
中禅寺で半泊男体山に登り、志津の小
屋に下りて三本松からその日の夜中す
ぎてから帰ったのが本土で初めての山
でした。また休みになるとこんどは
地蔵鳳凰に登ろうと芦安に泊ったが、
その日に帰るため早朝登って夜の九時
か十時でした。

そうしたら山岳会ができるというの
で大木さんと陸上運動部の部長の槍ヶ
岳へ行かれた丸山先生のおかげで付属
のような形で陸上部の笠の下で育った
のです。合議制の校友会があつて新し
い部をはじめと配分金が減るのでボー
ト部をのびて反対される。しかしわづ
かの差で部に対して五十円もいらいま
した。それで帆布屋の片桐で八角の竹
をついだテント二張を作り、もう一つ
おまけに小さいのをつけてもらいまし
た。このテントが後の破風山での遭難
のテントです。

リニックサックも信玄袋にヒモをつ
けて作ってきたのを雨が入るといった
ら、上にコップを作つてかぶせたりし
ました。大木さんの次に盛大にやろう

と二班に分け、木曾駒、御岳組とアル
プス銀座、槍と組合せまして、喜作新
道は常念から一の又に下り中山峠
から槍沢に出て赤沢の岩小屋から槍に
登つてね、また徳沢には牛がいました
ここは大正五年の五万が一があります
が、穂高は前穂だけだと思つていた。
名前も今とまるで違つています。燕へ
行くのも明科で下車、合戦小屋への現
在の道はなく、もう一つ奥の尾根に登
つて小屋の上の三角標に出ましたね。
白馬、赤城が、大台ヶ原行を思い立
つたら応募者が一人だけだった。
藤島さんとは大正六年に大町で出
くわして大沢小屋まで一緒で、平の小
屋の籠篋も針金持参で半日がかりで
修善して翌日渡つたり、槍までの途中
黒部五郎のてっぺんで大関久五郎先生
がヨーロッパ帰りでネイルドブーツを
はいて袋に手をつつこんで乾板の交換
をやつておられ握手のできぬ初対面
でした。その後もときとき出かけます
が五十年ぶりぐらいで、剣で四十何歳
の人そこにはひとりもいなくなつたで
す。

ひととお話をうかがい、辻村先
生も思わず夢のようだなとつぶやかれ
る。その後雑談に移り、古い地図も部
落名や古道を知るのには良い、今の上
高地は焼岳幅幅に入つていた、大木さ
んの大正二年北アルプス行では嘉門治
をつれて槍から下山して来たウエスト
ン夫妻との邂逅とその記録的な記念写
真、夜ワイワイ騒いでウエストン氏に
叱られた話、三の窓の雪溪ではワラジ
キャハンに鍛冶屋に作らせた三本歯を
しばりつけ、トビロを用いた、など話
が弾んだ。
また当日出席者の一人旅行部創設期
の齋藤直一氏の明治四十五年上高地、
槍穂高、大正三年の白根三山登山の紹

介もあつた。有名な大正五年の破風山
の遭難のテントを貸してあげたのは齋
藤氏で、旅行部の計画ではなく卒業生
の個人旅行であり、学校としては新聞
記者が山へワイワイ押しつけて迷惑さ
たなど、興尽きないお話が続いたが、
ご高齢の三氏に厚く感謝しご健康をお
祈りしてごやかな会を閉じた。

なお、日高氏になぜ旅行部と命名さ
れたかと尋ねたところ、昔は旅行
の途中で山に登つて、歩き山を下つて
歩いてまた山に登つたのことで、旅行
の方が通りが良いからとのことであつ
た。よき時代がしのばれる話である。
(油谷次康)

参考
○一高旅行部五十年
昭和四十七年三月 一五五頁
○失いし山仲間
昭和四十七年三月 一五五頁
昭和四十七年三月 一五五頁
何れも第一高等学校旅行部統の会発
行。
(当日の出席者・順不同)
辻村太郎、山崎安治、野口末延、村
井米子、横山厚夫、伊倉剛三、藤島敏
男、望月達夫、古沢肇、山本良三、武
田満子、和久井正明、近藤信行、金坂
一郎、福田宏年、大橋晋、春田俊郎、
野上成男、織内信彦、伊藤博夫、堀内
章雄、齋藤桂、齋藤直一、名須川浩、
菅野弘章、松家晋、中村純二、中村あ
や、越田和男、伊藤文三、河野幾男、
安田興夫、真鍋政道、福島健一、下村
秀一、滝川清、大野俊夫、小野有五、
大角留吉、油谷次康。

〔編者注・芥川の槍ヶ岳登山について
は、中央公論社「歴史と人物」昭和
四十八年五月号「芥川竜之介の槍ヶ
岳登山」(山崎安治)を参照〕

「山」の原稿をお送り下さい!!

ヒマラヤ輸送必読
—カルカタにおける
ライセンスの修正—
(日大OB) 中村 進

ヒマラヤ登山の荷物の輸送に關して
は、すでに多数の遠征隊により、詳細
にわたる説明がなされているので、そ
れをここで再び言うのでないことを初
めにご承知願いたい。
昨年の暮、十二月二十五日より、翌
年の二月三日まで、カトマンズ、カル
カタ、ジョグバニ、そしてピラトナ
ガールにて、日本大学ヤルン・カン登
山隊の荷物の輸送を担当した。一方、
一九七〇年の日大シタ・ツツラ登
山隊の時も、たまたま私が担当し、カ
ルカタからカトマンズまで、例によ
つてトラックと同行したので、輸送の
ことは大体理解していたのですが、今
回カルカタからピラトナガールまで
の輸送にあたり、カルカタにて書類
の修正を行わなくてはならないこと
が二つ生じてしまいました。

インポート・ライセンスのアイテム
5と6
インポート・ライセンスの交付を受
けるには、インボイス、パッキングリ
スト、それに英文の交付願い書をアタ
ツチして、外務省の登山局へそれぞれ
三部提出すると、それに基づき、外務
省は商工省宛にインポート・ライセン
スの交付願い書をわれわれに交付して
くれます。そして外務省へ提出したリ
ストの内、一部は外務省保管、一部は
商工省へ、最後の一部は遠征隊保管と
なります。

商工省では、さらに八部のパッキン
グリスト、インボイスを提出、そして
やっとオリジナルのインポート・ライ

センスが、インボイス、パッキングリストとアタッチされ、すべてのページに政府の裏印が押され、われわれに交付されるわけです。

さて、インポート・ライセンスには一番上に、ライセンス・ナンバー、その右に発行日がスタンプされ、つぎに荷受人の名前がタイプされ、つぎは、1から8までのアイテムに必要な事項が記入されます。このアイテム5には、インボイスに基づき、C・I・F カルカタ、またはC・A・F カルカタのアマウントが記入され、アイテム6

山下一夫氏 遺作展二つ

今井 雄二

故山下一夫氏の一週年を記念して氏の遺作画展が二つ開催された。その一つは、氏が多年会の顧問として後援をつづけてきたエーデルワイス・クラブ主催の「山下一夫・山と花の絵遺作展」で、四月十九日から二十一日まで池袋の豊島区民センターで開催された。これは同会々員が所蔵するものを持ち寄って展覧、油絵風景二、水彩画風景一〇、植物と花(水彩)二〇、世界各地のエーデルワイス(水彩)二、年賀ハガキ六枚等であった。

もう一つは山下家主催の「山下一夫画展」で、同家所蔵のものや関西方面などから出品されたものが、五月十三日から十八日まで日本橋柳屋画廊で開かれた。油絵風景九、水彩画植物二〇のほか、「秋の山草」、「山菜園」の水彩絵巻二点が展示された。滋子夫人の話によると、氏が多年にわたって描きつけてきた風景と山草のスケッチブックが数十冊残されているとのことである。

にはライセンズの有効期間がタイプされます。ここで、われわれは二つの修正をしなければならないになりました。その一つは、われわれは荷物に保険をかけなかったため、C・A・F カルカタのインボイスのため、ライセンズの総額は当然その金額がタイプされました。しかし、現行のカルカタ・カスタムズ・ハウスでのルールでは、すべてC・I・F でカウントしなくてはならぬとわれわれのライセンズは修正しなくてはならぬになりました。すなわち、C・A・F をC・I・F に総額がアップされたわけです。もちろん、これは書類上の作業です。

この修正には、在カルカタ・ネパール領事館に書類提出して、つぎの修正と一緒に新たな書類が発行されました。二つ目は、アイテム6のライセンズの有効期間ですが、一般的には、発行日より、六カ月の有効期間が与えられ、ライセンズにタイプされます。しかし、日本で船積みを終え、B/L(船荷証券)が発行され、その後、ネパールに渡り、ライセンズを受けるときは、アイテム6は、「Already Shipped」と記入されなくてはなりません。

すなわち、インポート・ライセンズの有効期間のスタートは、B/Lの発行日より前でなくてはなりません。B/Lが発行される以前にインポート・ライセンズの交付を受けた場合は六カ月の有効期間がタイプされ、B/Lが発行された後は「Already Shipped」と記入されれば、ライセンズは有効でなくなってしまう。この二点です。

これからわれわれと同様なルートでヒマラヤへ荷物を発送する連隊の方でC・A・F (Cost and Freight) 保険を掛けない時は、カルカタです

に述べたような修正が必要。また、ライセンズの交付を受けたら、アイテム6をよく確認すること、さらに最下段のネパールで通関するカスタムズ・オフィスの名前もよく確認すること、こもときどき先方で間違えられます。なお、蛇足ながら、カルカタの通関業者がおりますが、カルカタのカスタムズ・ハウス(Calcutta Customs House)に、たくさん



の山岳研究所を訪ねて・坂倉登喜子
祝杯をあげておられた。中へ向って、お祝いの言葉をかけると、どうぞどうぞと招じ入れられて、突然横先生が玄関先に座っておられて、ここやかに挨拶されたのでびっくりした。入ってゆくと十曜会の常連の山崎評議員を始め、ウ祭のために見えた織内副会長や、自然保護委員の渡辺公平氏等十名ばかりの会員の方々が来ておられ、山菜料理は迷コック長の伊倉氏の手料理で、いかにも山小屋らしい雰囲気であった。

今年も六月一日晴天に恵まれて島々宿から徳本峠越えをした一行二十八名が、夜行疲れと暑さに耐えながら、漸く峠から下山して明神池へ着く頃、コース指導の平野先生と同行した上高地直行組の人たちと、裏道から迎えに行こうとかけたのは、心よい夕風が梓川の流れにひんやりと流れる頃であった。三つとお腹をすかして下山してくるだらうからと、お菓子をサブに入れてゆく途中、今年完成してオープン間近の日本山岳会山岳研究所の前を通ることになるので、ちよっと立寄りながら明神池まで行くことにした。

河童橋から数分分神への裏道に入って左を見ると立派な山荘が見える。これが正しくは山岳研究所で立派な表札がかかげられ、一般の人は利用できませんと明示してあった。玄関を入ると素晴らしい一階の白いソファのある室には、すでに先着の大先

Old China Bazar Street Calcutta
-1.
(TEL) Office 22-4251
C.H. Camp 22-0857
22-5809
②Mr. C.K. OJHA
SHAIKH Z PANDIT 15/7 Stand
Road Calcutta-1
(TEL) Office 22-5652
22-0280
(Cable) SAMURA
なお、詳細をお知りになりたい方はわれわれの方へご連絡下さい。
(四九・三三二)
一群馬県前橋市平和町一四一六一

が山岳研究室となる場所での何の研究でも使用できるからと伊倉さんは専ら山荘のPR部長、私たちが女性の登山教室をここに移動して早速ブランチしたいなあーと思いつながら、峠越えの人たちと白樺荘へ戻った。
六月二日の碑前祭の日も絶好のお天気で朝早くから田代池や明神池へ散歩にでかけた人たちは全員(三十八名)八時に揃い食事、碑前に向って九時半頃から練習を始め、十時から碑前祭が開催され、穂高の峰に響けとばかり全員ウエスタン祭へ捧げる歌を合唱した。

「お茶の水のルームが移動したようです。ねーと、私も一緒に祝杯を重ねて嬉しい歓迎の時を過ごし峠越えの一行を待つことにした。毎年ウエスタン祭に本部からは大先輩や役員の方々が見えるが、一般会員は私たちコーラス部員の女性たちだけで、若い人たちはどうしてこんなすばらしい季節に上高地へこないのだろうかと話しい、山荘まで来たことだしウエスタンの歌も一緒に歌えたら...そして信濃支部の方たちにも協力して共にこの雰囲気味わって欲しいものだ」と語りあった。
上高地の山荘は、一階が食堂兼談話室、左側が台所、お風呂もトイレも都合なみで、二階が畳敷きの寢室、半分

UIAA総会に出席して ①

鈴 木 郭 之

ソ連旅行には絶対必要なイントウーリストによるホテルの予約もせず、ただだ、ソ連山岳連盟の招待状と、在モスクワの海外連絡委員、田村俊介氏を頼りとし、おっぴろげびっくり、四十八年十月二十一日、日航四四三便で、もう冬の、いかめしい制服姿にあふれた、シエレメチエボ国際空港に着いた。

それ以来、田村氏なしでは、今回の出席も多分おぼつかないものになったかも知れない位、氏には、最後までお世話になりなすであつた。第一、モスクワからグルジア共和国トリシへ行くのに、全く別の空港ドモジエドボから行くことも、氏の後にくついで行つて、始めて分つた次第で、もしこれが一人だったら、どうなつていたことかと、今思うと背筋の寒くなる思いがする。

二時間足らずの飛行で、寒い冬のモスクワから緑豊かなトリシに着く。空港には、ソ連山岳連盟会長ポロヴィコフ氏、グルジヤ山岳会会長タマリ氏をはじめ、トリシの街並みを見下せるホテル・イベリヤで、部屋がきまるまで、約二時間待たされた。以後、ことあるごとに「待つ」ということを経験させられたが、「待つ」ということには、いらぬものを感じ、資本主義的サービスというものを期待したら、とてもいたまれないだろうが、視点を変えて、別な次元に自分をあげ、また格別の楽しさがあるというところも分かつてきた。

と、行き交うグルジヤの人達は、もちろん、ロシア人とは違つた顔つきで、髪黒く、色は浅黒いトルコ系の顔立ちで、子供達は、例外なく、大きなつぶらな目に、丸い顔。言葉は、グルジヤ語で、文字は一見タイの文字に似たグルジヤ文字。ここはスターリンの出身地で、未だにスターリンへの尊敬の念あつく、ウインドーに堂々とスターリンの大きな写真が飾つてあつたり、パンスの運転席にお守りのようにポートルトが貼られたりしていた。ここは北のモスクワとあらゆる意味において対立していた。米国の北部に対する南部の如く、ドイツの北部ハムブルクやブレーメンに対する南のババリア地方の如く、イタリヤの富める北に対する貧しい南の如く、ここでも、いわゆる「進歩」と「保守反動」は、北と南の対立に置きかえられるのだろうか。

翌二十二日、今回の会議の会場にあてられているグルジヤ山岳会にゆき、登録を済ませた。そこでアバコフ氏を紹介された。氏の世界的な名声とは全くうらはらの、地味で小柄な、笑うと横さんを彷彿させて、思わず尊敬の念をひきおこさせるような人柄が自然とにじみでてくる感じであつた。その素晴らしい業績も、静かなもの腰と、温和なまなきの下に消えてしまひ、ただ片腕しかない節くれだつた大きな手と握手をした時、その強さに、飛び上るほどの痛さを感じた。

次の夜、故袋一平氏（前海外連絡委員）と横浜山岳会の招きで来日したところのあるグルジヤ山岳会のギオルギ・アバシジエ氏（通称アギ）、リエバス・ハザラジエ氏（レズ）、オタリ・ハザラジエ氏（オタリ）、チト・ダンガジエ氏（チト）等の招待で、田村氏と二人でレストラン・アラダウへ行った。この日より連日のワイン攻めで、つくづくと彼等の山の強さもさることながら、酒の強いのは驚きかつ呆れた。博物館長のアンフリーコフ氏が座長になって、まず日本とグルジヤのために乾杯、山と山仲間のために乾杯、日本とグルジヤの交流につつまれた故袋一平氏のために乾杯、に始まり、「...のために」が際限なく続き、そのたびにグラスに満々とつがれたワインを飲みほすので、テーブルにはみるみるワインの空き瓶が林立し、とうとう最後に私はダウンしてしまつた。しかしこうしていろいろと話をしてみると、日グ交流に先駆をつけられた袋一平氏の功績が今さらながらうかがわれ、この袋氏の意志をついで、せっかく結ばれた絆をより強固なものにする必要が痛感された。この意味においても、現海外連絡委ソ連担当の田村氏の今後のよい一層の活躍に期待を致さねばならぬ。

グルジヤのやまやの体は、まるで違う。いざという時のスタミナはものすごいそうである。田村氏の話では、五〇〇〇m位の山というそこへ行くつと西翌日降りてくるという、一晩で登りつて歐目の連中は同じことをして、高度馴化をしないから、途中でまいてしまふそう。写真を見ても、ザイルさばきなど、ボリシヨイ・サーカスの如く、アクロバティックなものであり、同じ頃、クリミアでは、日本から新潟大も参加している岩登り大会が開催されているはずで、これなど、いかに早く登り、降りてくるかという競技であり、一昔前、丹沢の沢を一日何本やったか競いあつたようなもので、われわれの登山に対する考え方も、根本的に違いを見せている。ヴァリエーションを開拓したり、楽しんでやるより、まず規定のむずかしいルートをとらんとん登って、スポーツ・マスターの称号を獲得するの。当面の目標であり、強いものが勝つという素朴な論理に裏打ちされたソ連山岳界の強さは、特異なものと言わざるを得ない。アバコフ氏も言っているように、この国では七〇〇〇m以上の高所に登つた人数は一五〇〇人以上に達していることを見ても、登山の総体的なレベルの高さと強さを物語っていると言えよう。グルジヤの登山家達の夢は、やはりヒマラヤ登山であり、それも「酸素なし」での登頂を考えているという。体力的にいえば不利に見えるわれわれ日本人にとつて、登山とは、終極的には強者のみに許されるという素朴な論理を素直に受け入れることが出来るだろうか。国際エベレスト南壁隊で、ウィラースが「強いものが残つて、最後に登るのだ」という言葉の中に登山の最終目的が集約されているのだろうか。ドイツ山岳連盟のドムケ博士は、日本人は、精神で登るといつていたし、ソ連ア連盟のギッペンレイテル氏は、日本のさむらいの本を田村氏に頼んでいた位日本人の精神力を評価していたが...?

英国山岳会、BMC (British Mountaineering Council) 日本の日山協(にあたる)の役員、フランク・ソラリ氏は、登山はあくまでプレイであり、他のスポーツと違うのは、競技の代りに、冒険精神が加わることだといつていた。英国では、小学生から、希望者を集めて二ヵ月位、登山研修所に入れて、山に親ませ、山の基本を教えるのだそうである。これら研修所は、BMCなり、山岳会が開いているのですか、と聞いたところ、そんなお金はありません、全部地方の公共機関が財政的な面をまかなつていますという返事だつた。なお、BMCはいろいろな山岳団体の上部統一機関であり、役員も多くは、英国山岳会の役員のことだ、なにか本会と日山協の関係によく似ていた。また、スコットランドの山岳団体は、このBMCには参加してなく、別にBMCと対立する組織を作っているそうである。

夜、すべての日程が終つて、軽く一杯だけということ、田村氏と地下のバーに降りてゆくのだが(しかし、絶対一杯で終つたことはなかつた)その常連は、スイスのエグラー氏、バウムガルトナー氏、オランダのレオポルド氏、ドイツのドムケ氏、フリードリヒ氏など、とくにエグラー氏の酒の強さは、わが田村氏と好敵手であつた。このスイス遠征隊の元隊長エグラー氏は、明治の男、吉沢氏のごとくなかなかの頑固で、たまたま登頂中のRCCのエベレストの南壁からの登頂を最後まで信じなかつた。帰国まぎわに、グルジヤ山岳会から、またブルガリヤの代表から登頂の成功を聞いたとうとうにが虫をかみつぶしたやうな顔をして、おめでどうの握手をしにきた。こんな訳でエグラー氏には、最後にモスクワで別れるまで大変ご馳走になつてしまつた。こうして外国へ来ていて、RCCであれ、岳連であれ、JACであれ、海外登山は、良きにつけ、悪きにつけ、すべて日本という単一な概念に集約されてしまふ。こんな訳で、晩さんのテーブル、アギ(グルジヤ山岳会)が、RCCの南壁登頂中のことを述べ、成功を祈つて乾杯の音頭をとれば、みな一斉に杯をあげ、われわれ二人は立つて返礼をせねばならず、ポーランド代表のヤンク氏に、キッスを受けたり、ワイン攻めにあつたりで誠にこそばゆい限りであつた。

(続く)

●山岳書の出版 について●

いっだったか、古書展の目録を見ていたら、メイスンの「ヒマラヤ」(望月・田辺訳)が一万八千円もしてた。最近ではもっとあがったかも知れないが、とにかく法外な値段である。この本はヒマラヤを目指すほどの人には是非一読してほしいのだが、こんなに高くては、学生などにはちょっと手が出せないだろう。原本の *Abode of Snow* の方がはるかに安いだから、すべからず原本で読め、というのものとつづの提案だが、ヒマラヤに行く誰もが原本で読めるという訳にはゆかない。いい本があるという事はそれ自体おおいに登山界をひきよすことなのだ。原本で消化な読み方をすすめるくらいなら訳本で読みこなした方がましである。

ヒマラヤに関してはいろいろな本が過去に翻訳されているが、そのほとんどが高価な古本でしか手に入らないのは困ったことである。本格的に研究する人は原著に直接あたるべきだろうが、基本的な何冊かについては訳本が適当な値段で買えるような状況が望ましい。

○〇果の学生山岳連盟の委員長と話をしていたらアルバート・ママーリの名前を知らないのが驚いたことがある。この連中の知識ときたらせいぜいガス・トン・レビニエアーあたりで止ってしまっている。彼等はその程度の知識をもとにして山を考えたり、議論したりしているのだからお粗末に議論するを得ない。レビニエアーも逸材にはちがいないがママーリの比ではあるまい。しかし考えて見るとママーリの「アルプス・コーカサス登攀記」は新本屋

のたなと並んではいない。ウィンバーの「アルプス登攀記」なら文庫本にあるので、さすがの彼らも知っている。この場合、本屋にあるかないかということが、知る知らないの分れ道になっている。初心者にとってはそれもやむを得ないことだと思ふ。文学的な価値ということでは、どうなるか知らないが、少くとも現代の登山家としての価値という観点から考えればママーリの重要さはウィンバーに優るとも劣ることではあるまい。現代の若い登山家にとってはママーリは読書の最たるもののひとつであるはずだ。ママーリを読む機会に恵まれない入門者たちは、近代登山を考え理解するための重要な足がかりをはずされていくことになるのではないか。

日本の本であるとして外国の訳本であるのを問わず、たいいてい名著は過去に手をかえ品をかえて出版されている。単行本でも出たものもあれば、山岳全集物におさめられたものもある。しかし、大部分は短期の出版で終わってしまっている。出版社がつぶれて途絶えた例もある。こうして現在は、登山の流行とは裏腹に山岳書の出版の方はまったく低調を来している。「いまの登山家達は山の本など読みはしないのだ」という意見もあるが、私は必ずしもそうだけとは考えない。しかしかりした恒久的な山岳書出版の企画がないから、読みたくても読めないのではないか。そうした状況の中では山岳書の趣味といえは骨董趣味に変形してしまっている場合も多い。

山岳雑誌で良書何冊などというアンケートをよく目にするが、選ばれた本の大半が新本屋で手に入れることが出来ないという現状は奇妙としか言いがたい。

いまでも山岳書を手がけている出版社はあるにはあるが、大体においてすべての出版社が片手間仕事に散発的な出版をしているにすぎない。たいして山を知らない企画者がむしる商人の立場から手がけている場合が多い。しかし、商人の姑息な見方にも案外商売上の欠点は多いもので、必要不可欠な本を見抜く眼力にとほしい彼らが必要も現実的に本当の成功をおさめているとは限らない。

名著を安く恒久的に出版するという企画が現実的な面で成功しないという証拠はどこにもないはずだ。技術書、山岳辞典、案内書にいたっても本当にいい物は少ない。現在の登山界に出版に関するすぐれた企画をなし得る能力のないことの方がはるかに大きな問題だと思ふ。

いまや日本山岳会がそのような企画と正面から取り組むべきではないだろうか。それは困難であってもやりがいのある仕事だし、なによりも登山界を益することによって日本山岳会発展の基石を新たに作ることにほかならないか。やり方によっては不如意な財政の救いにもなる。



その中の拙文中に、ジャコ・ギャルモの蔵書票に記されたラテン語の意味が明らかにしたという箇所がある。私の勤務先の高校の英語科教諭諸氏としばしば鳩首協議の結果、こういうことであらうと落着いたのがつきに掲げる解である。ご批正願うた。

LIBRUM SCRIPSIT, PUERUM QUIS DOMUM AEDIFICAVIT (誰が家を建てたか)
GENIVIT (誰が本を書いたか)
ILLE EST HOMO (それは人間である)

判ってしまえば他愛のないことなのだが、私の小さな疑問が一つ解消したことになる。ギャルモの蔵書票は年古りて、やや鮮明さを欠くので、そのコピーをここに掲げたがよくみえないのは残念だが、幸い、深田久弥さんの要を得た説明があるのでつきに引用しよう。

「手前の雪原に数張りのテントがあり、その彼方に高くK2がそびえている。その山の右肩に K2 on CHOORI 8620m の文字が入れている。図の下部の両脇には、スイス山岳会のメダルが描かれ、その間に Es-Jubris Dr. Jacot-Guillarmod と書かれている」とある。さらに言を続け、「K2の山姿の上部と両脇の三方を枠で囲み、そこにラテン文字が入れているが、それ

がどういう意味の言葉か、まだ明らかにしていない」とある。いずれも「K2を現わした蔵書票」という文章からの引用である。こうしたまごまごとした事柄にまで注意をはらっていた、深田さんのヒマラヤに対する愛着というのはやはり大変なものだったのだと今になって、しみじみと思うのである。

この小文を書いているところへ、丁度、カラコルム偏狂者みたいな友人から、アメリカ隊が今年実に二〇年ぶりにK2登山の途に向かうという電話があった。かねがね、わがJACも、そろそろエヴェレストなどというところから足を洗って、新鮮なフィールドへ目を向けて欲しいと思っていた矢先の報道だったので「やったな」(というか「やられたな」というべきか)と思つた。しかし、この山に払ったアメリカ人の犠牲と、壮烈な肉迫りを思えば、今度こそ、無事に頂上立って欲しいと願わずにはいられない気持ちになる。

飯森山

望月達夫

数年前の五月初旬、藤島(敏)さんと、残雪豊かな会津朝日岳へ登ったおりに、偶然かけられた声の主が会津若松在住の会員森沢堅次君だ(一九五五m)の森沢君と日中の飯森山(二五九五m)へ登りたいと連絡しあつてから、もう四年ぐらいが過ぎ去る五月十八日に目的を達した。

飯森山のこととは藤島さんも本誌三四一(昭和四十八年十一月号)に書いているが、東京からわざわざ登りに出かける輩は、まだまだ多くなからう。一行は藤島(敏)、笠原藤七、山田哲郎、室次雄、森沢の五氏と私とでみな本会会員。十回ぐらい登っている

うちで今日が一番上天気だと、東道役の森沢君がいったほどの快晴。途中まではブナの新緑、タムシバ、ツツジの花が美しく、上部は豊富な残雪に包まれていて、絢爛たる春の山を堪能したが、日中温泉からゆっくり上下したといつても、往復十二時間以上もかかったのはいさか長丁場で、七十八歳の藤島さんには少しお気の毒であった。しかしフジカキハレ大明神のお蔭で、眺望のよかつたこともまた格別、飯豊連峰は終日西側に望まれ、この山に詳しい笠原さんから、あれが杖差ですよと指差して教えて貰えるほど、朝日連峰の右手には真白な月山まではっきり見えた。

一つ手前の鉢伏山(一五七六m)を越えて辿り着いた飯森山の頂上には、一等三角点と少し離れて小さな木の社と石祠があつて、そこだけわずかに雪から解放されてた。森沢君がいてくれた緑茶のなんとうまかつたこと。スモモ、八重桜、椿の咲いていた日中温泉は、近く大捨沢にダムが出来るので、もう少し下流に移されるそうだが、建物が新しくなると、ひなびた趣きがなくなってしまうだろう。(一九七四年五月)

海外からのたより

ジャヌー登頂(二信)

橋村 一豊

4月6日、標高五九〇〇mにC3を建設、ABCとする。これまでに三〇〇〇mのフィックスドロップとワイヤー梯子を設置して荷上げルートを確保した。ABCより上は急峻で複雑な雪庇水氷の入り乱れた屋根であり、あらゆる水雪登攀技術が要求された。二人一チームとなり連日交代してルートを開きり拓く。特注のジュラルミンのスノー

バーが極めて有効であった。水にはコの字型とネジ込式ハーケンを併用し、ジュラ梯子四カ所、ロープ二二〇〇mをフィックスしたが、シエルバの荷上げも登りはユマール、下りはヒラリカに頼るという技術的に極めて困難な箇所であった。

六五〇〇mのC4よりさらに急峻かつ複雑な氷尾根を辿って王座氷河上部の雪原状六七〇〇mにC5を建設、さらにジャヌーの東肩七三〇〇mにC6を建設した。

この間二件の事故、ドカ雪、地吹雪、雷などが相ついでおき、加えてシエルバに病人が続出して下山者がでるなど悪条件が重なって登頂が危ぶまれた時期であったが、幸いにも各隊員の士気がおとろえず頂上を取らねば絶対引き下がらぬという不退転の意志が隊を支配したため、燃頂予定日の大幅な遅延による食糧、燃料等の物資不足にもかかわらず、五月十五日の夜、小原、第二登頂隊橋村、山田が登頂体制に入ることができた。C6の建設はシエルバの不足により隊員自身が苦しい荷上げに参加した。

シエルバの事故とは4月23日、C3よりC4へ上がるシエルバ5名のうちリーダーのカルマがヒドンクレパスに落ち、二十五mの深さに止まって命はとりとめたものの肩の骨を折る重傷、一週間の難作業でBに収容の後、ヘリでカトマンズに搬出した。

第二の事故は5月9日、C5上のルート開拓に当っていた宮崎、吾妻両隊員とシエルバ2名が、新雪雪崩に襲われて約80m流され、大クレパスの手前10mで幸運にも止ったが、セカンドリーダーのテンジンは上半身を強く打ち歩行不能。C5はこの日から怪我人の看護とC6建設の拠点という二つの目的をもち、さながら野戦病院の観。シ

エルバ全体の士気は著しく低下しC4以下では脱落者が続出した。シエルバを説得し上部への活動を続行するためこの時ほど苦勞したことはなかった。テンジンは宮崎のリードで19日かかずの難場を通過してBに救出した。

5月16日市川、小原によりC6より上のルート作業を行う。十二年前のフランス山岳界全勢力を挙げ、偵察を含め3回目に登頂したという面からは今が来る。今回のわれわれの登頂は技術的、物質的には成算をもって当

たが、十二年前のテレビ隊に較べ明らかにシエルバの質が低下していること(当時30kgを荷上したところを今度は20kgとまり)、シエルバの数で10名少ないことおよび二回の人身事故で隊員の登攀勢力、シエルバの荷上力を大巾に負傷者の救出に奪われたことなど重

なっており、登頂時にはギリギリ一杯の状態に追込まれたことは否めない。

5月18日、C6の市川、小原はさらにルート作業を続行した場合によっては頂上に行くこととし、もし登頂できぬ場合はC5の橋村、山田が代って攻撃し、なんとしても頂上だけは取るという計画で行動を開始した。頂上に立たねばヒマラヤ登山は全く無意味であるといふのがわれわれの持論である。

C6を午前5時に出発した市川、小原はフランス隊の三分の一も進んでいないフィックス隊の終点を登頂を強行し、午後五時五分体力の限界を

おして遂に頂上に立った。同日夜10時45分、フラフラの半病人の態で無事C6に帰着した。星空であったが幸いしたがフィックス隊が不十分のため帰路の酸素欠乏と相まって危険きわまりない登攀であった。

全体的に面ギリギリ一杯の物資となつていたので二次攻撃を止め撤収活動を強行し、二日間で全キャンプをひきはらった。5月20日全員無事Bに帰着した。

結論としてジャヌーは登攀技術上でも、物資補給、天候、ルートファイディングの面からも極めて難しい山でフランス山岳界全勢力を挙げ、偵察を含め3回目に登頂したという面からは

うかがえる。今回のわれわれの登頂は技術的、物質的には成算をもって当

たが、十二年前のテレビ隊に較べ明らかにシエルバの質が低下していること(当時30kgを荷上したところを今度は20kgとまり)、シエルバの数で10名少ないことおよび二回の人身事故で隊員の登攀勢力、シエルバの荷上力を大巾に負傷者の救出に奪われたことなど重

なっており、登頂時にはギリギリ一杯の状態に追込まれたことは否めない。

図書紹介



山の心

横 有恒著

「わたしの山旅」いらい六年ぶりで横さんの新著に接することができた。もっとも、「本書は毎日新聞社のすすめにより、主として同紙上に寄稿した

しかしわれわれはこれを僥倖による成功とは思わない。危険は大いに存在したがわれわれの実力、士気、判断力による当然の成行による登頂であると確信している。またこの成功に寄与した最も大きなことはつぎの二点である。(1) 隊長とドクターを除く七名の隊員の誰もがジャヌーの全ての場所において、ザイルのトップに立ってルート開拓に当れる登攀技術をもっていたこと。すなわち岩と氷の両方に熟達、精通していたこと。(2) 全隊員がいかなる難局に当たっても、『頂上をとるまで絶対ひきさがらぬ』という鉄の意志を堅持していたこと。

おわりにヒマラヤ全域を考える時、K2とジャヌーは今まで登られた内では最も困難な登山の双壁であると私考します。(宮下秀樹宛)

ものを集め、これに二、三の随筆を加えたものである」とあとがきに記されているように、本書のために書きおろされた文章はない。たとえば「山岳十話」や「マナスルの印象」などは「山岳」にも掲載されたし、「マナスル通信」は当時の新聞紙上で、また単行本「マナスル登頂記」で愛読されたものである。その点では、「山行」以来の著者独自の文章を募って来た人たちにあっては、あらたな感激の対象とならないうのが残念である。だが、本書のなかには、あるいは今まで見のがして来たような文章も、なくはないと思われる。巻頭の「四方山話」とか「登山と人生」などがそれで講演速記だから、ここに収録されたのは幸いだった。横さんは、私たち後輩を当惑させるほど謙虚で、およそ知識をひけらかす

ようなことはされない。控え目に語られるが、六十余年にもおよぶ山登り、それも近代登山の歴史とともに歩いた経験と、古今東西にわたる視界の広さのなからにじみでる言葉には、はかりしれぬ重さと味が感じられる。ここで例を引くほどの紙幅はないが、おそらく会員諸氏の読後感も同じではないかと思ふ。

先駆者のな、山登りへの情熱とともに、自然景観に対する著者の深い愛情もまた、私たちの胸を打つ。森林の乱伐、環境の人的破壊などに向けられる著者の言葉は決して荒々しくはないがきびしさ、すばしさを読むものに感じさせる。この大先輩の文章を、若い世代の人たちに味読してもらいたいと思ふ。

昭和四十九年五月、毎日新聞社刊、二二〇ページ、定価七八〇円 (島田 巽)

踏 跡 第四号

防衛大学校山岳会と同校友会山岳部の報告書であるが、本号には「アルゼンチン中部アンデス登山特集」のサブタイトルが付されている。因みにこの前の第三号は、ローガン峰の特集である。

一九六八年の一〇月から翌年の三月まで、アルゼンチン陸軍当局および、現地第一山岳歩兵連隊の協力関係のもとに、中部アンデスの高連山脈に登山活動を行った経過の準備段階から終結に至るまでを丹念に記述してある。

「山岳」の第六四年と合報二九三号にもこの登山隊の成果の概要が掲載されていたが、処女峰のネグロ主峰(六一五二m)を、従来アルゼンチンの登山家が東北面からアタックして失敗していた経過を検討して、この隊は南面から攻撃し初登頂の栄冠を手にする。ついでマルモレイホ東峰を目指す。時間的な制約があったため最終キャンプからの高度差を処理しきれず、これを断念し、つぎの目標エナノス(五七〇〇m)へと転進する。しかしツブングア川の流れに渡渉を阻まれて、これまた撤退を余儀なくされ、今度では約二〇〇キロ離れたディアマンテ湖周辺の山域へ、トラックを利用して移動、これを集中的に登り、マイブー、アマリイジョ、ゴロー西峰、東峰、ラグナーの諸峰を手中におさめている。

このうち、ネグロ峰、ゴロー西峰、東峰、ラグナー峰はいずれもこの隊の初登頂だと述べてある。

また、装備、通信、気象、その他を含めて一三のアイテムに分類した研究報告文があるが、この報告書一八〇頁中約三〇頁を占める隊長朝井一男防大教授(本会会員)の一般報告は、計画の進め方、資金集めの苦心談、そして現地へ乗りこんでアルゼンチン側の軍医から異常心音の故をもって高所地域への参入をとめられ、後事を川上隆登攀隊長に託して心ならずも本隊から別れて、欧州経由帰国の途につく旅行談が、微に入り細にわたって述べられ、朝井氏らしい読みものとして筆者の興味をひいた。

それからこの遠征を強く支援した、時の防衛庁長官増田甲子七氏が若く山登りに熱中していたいきさつなどにふれ一文を寄せているのが眼をひく。同氏は、日本山岳会のエネレスト後援会長であり、本会の古くからの会員である。増田氏のようなよき理解者がいることが、防大という特殊な学校が再三にわたって海外登山を行うことができる隠れた力となっているのではないかと考えた。

昭和四十八年十月発行、一八三頁 非売品 (織内信彦)

お知らせ

追憶集
「松方三郎」を出版
K K 共同通信社出版局

K K 共同通信社は元社団法人共同通信社専務理事松方三郎氏の一周忌(九月十五日)を前に、新聞人として、国際的アルビニストとして世界的に名を知られた同氏の遺徳をしのぶため、追憶集「松方三郎」を出版することになった。

世話人は、松本重治、福岡誠一、藤島敏男、草野心平、福島慎太郎の五氏で、編集制作はK K 共同通信社出版局が当たる。

追憶集「松方三郎」はB6判三〇〇ページ、第一部「松方三郎遺稿集」第一部「追憶文集」に分かれ、松本氏の追憶座談会、詳細な年譜、写真集などもつけて故人をしのぶ。完成は九月上旬の予定。

配布方法は、関係方面に一部贈呈するほか希望者には実費頒布する。頒価は一部一三〇〇円(郵送料別)予定)なお、購読ご希望の向き、または問い合わせは、東京都港区赤坂一丁目九二〇、K K 共同通信社出版局まで(T E L 東京(〇三)五八六一一〇七三、一〇七四)

暑中お伺い申し上げます。(小倉)

昭和四十九年八月二十日発行
113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事株式会社
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今 西 錦 司
編集代表 山 崎 安 治
(313)二二八六(代表)
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

山を愛し、山に生き、
そして山で死んだ作家
深田久彌

茅ヶ岳で急逝して以来三年、
いよいよ声価の高い「山の文学」を
未刊作品をも含めてここに集大成!

深田久彌
山の文学全集

全12巻(監修)●小林秀雄・井上靖・三田幸夫・今西錦司

★毎月十五日一巻ずつ刊行

<p>1 わが山山※</p> <p>2 山頂山麓※</p> <p>3 わが愛する山々※</p> <p>4 瀟洒なる自然※</p> <p>5 日本百名山※</p> <p>6 雲の上の道</p> <p>7 ヒマラヤの高峰</p>	<p>8 ヒマラヤの高峰</p> <p>9 ヒマラヤの高峰</p> <p>10 シルクロードの旅※</p> <p>11 中央アジア探検史</p> <p>12 九山山房夜話</p>
--	---

※印既定価一、八〇〇円

朝日新聞社

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部
〈B 5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円
シプトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳
〈A 5判440頁〉定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 〈菊判584頁〉定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著〈A 5判482頁〉定価1,500円

遠い山・近い山

望月達夫著 〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

山日記1974年版

日本山岳会編
〈A 6判342頁〉定価850円

山 岳

日本山岳会編
〈A 5判〉
67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編
〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 〈B 6判202頁〉定価480円

日高山脈

北大山の会編
〈菊判362頁〉定価2,200円

原野から見た山

坂本直行画文集
〈B 5箱入布特製本〉定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著〈B 5判206頁〉定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

いろりばた

南会津山の会
〈B24どり判320頁〉定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著〈四六判400頁〉定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 〈菊判280頁〉定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

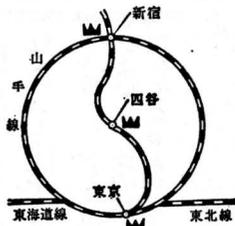
高橋 進編 〈A 5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たたら
山の店
- フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664
日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けどもし、どうして
要るものがある。
なにしろ人間ですか
しして登山ですか
どしても必要なもの
をこしらえてやる
責任はもっています

かたるゴジュンバ
でんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上丁4-7 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



会務報告

六月理事会

(六月七日午後六時ルーム)

▽出席者 今西会長、織内副会長、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、松丸、大倉、山本、浜口各理事、金坂評議員、高遠、三枝各委員

▽委任 中屋副会長、浜野、丹部、岡山各理事

▽議案

・上高地山岳研究所建物敷設使用期間更新の件 (伊倉)

昭和四十七年から借地している山岳研究所の建物敷が本年九月三十日までその期間が切れるので更新の手続きをとりたい。

・山研管理人選任の件 (伊倉)

山研管理人の人選について、地元高山山氏に依頼していたが、梓川村在住の津村蒼治氏(六十六才) 夫妻をその候補者として推薦されたので同氏を採用したい。

・エベレスト南西壁登山計画の件 (宮下)

現在エベレスト登山の申請は七九年春まで終了しており、七九年秋と八〇年春はまだ正式な登山申請はしていないが各国登山隊の申請希望はまだまだ続くものとみられ、フランス隊をはじめ、西ドイツ、オーストリア、イギリス等の各隊が南西壁を狙っているのでは、はじめて南西壁を試みた日本隊によって、七九年秋と八〇年春の登山申請をして正式許可をとりたい。この計画について種々検討現段階としては早急に登山申請をして許可をとることで了承したが、なほ評議員、名誉会員からも意見を聞く必要があるというので来る十四日名誉会員も交えて評議員会を開くことにした。

▽報告事項

・神谷名誉会員御逝去の件(伊倉)

五月二十日白血病のため亡くなられた。葬儀は二十四日東五反田の本立寺でとり行なわれ、会から織内副会長他四十名余りが参列、生花と弔辞をお供えた。

・ウェストン祭と故尾崎喜八氏追悼会 (板倉)

本会から織内副会長始め会員多数参加した。尾崎氏の追悼の集いにはご遺族の方々もみえられ、高山顧問と種名誉会員から故人を偲ぶお話があった。

・会費納入状況について (伊倉)

五月末現在の本年度会費の納入率は二七・六%、(昨年同期一七・八%) 新入会者は二十五名(昨年同期八名)である。将来の会の財政については、会費の値上げ等もふまいて財務委員会を検討する。

▽委員会報告

・山岳 (近藤)

①山岳六十八年は六月二十日頃校了となり、七月中には出版のはこびとなる

②大館から話のあった山岳名誉全集出版について、近藤と山崎評議員がその衝にあたって近く委員会を組織して具体的な案をつくりたい。

・山日記 (松丸)

山日記の編集にあたって、しばしば懇談会を開いて意見をうかがったが、一般の固定読者層が厚いので、今すぐ内容を変えることができない実情であるがなお検討したい。五十年版は十一月中に出版する。

・図書 (山本)

今年度は図書の整理に重点をおく。なお例年催している山岳図書を語る夕べ、図書交換会、山岳史懇談会のほか会員のアマチュア写真展を予定している。

・医療 (浜口)

山岳診療所助成金として五十万円交付になった。夏山診療所を開設する大学にそれぞれ分配する。

・自然保護 (織内)

秩父連峰スカイラインについて反対を表明してきたが、地元の計画はどうかを実際に調査してきた。委員会から作成して山梨県に要望書を提出する。なお近く知事に面接して会としての態度を表明したい。

・青年懇談会 (大倉)

六月二十五日午後六時から三羽 勝氏を囲んで、また七月六日横名誉会員を囲んで懇談会を開く。

・指導委員会 (大倉)

登山技術講習会を五月十七日、十九日谷川岳で開催した。会員十名非会員二名の参加があった。

昭和四十九年度 図書委員会行事予定

(1) 継続および新規計画

- ・和書目録の作成
- ・洋書目録の作成
- ・図書の本格的整理
- ・図書の計画的購入
- ・アマチュア写真展の開催
- ・覆刻版(山岳その他)の発行
- ・定期行事
- ・六月八、九日(土・日)懇親会(谷川岳)
- ・九月十八日(水)「山岳図書を語る夕べ」(望月達夫氏)
- ・十月七日(土) 図書交換会
- ・十二月九日(土) この一本展
- ・二月中旬 アマチュア写真展
- ・三月十九日(水)「山岳史懇談会」(松高山岳部・今井田研二郎氏他)

集会委員会より

昭和四十九年度の集会委員会の計画はつぎのとおりです。会員各位のご参加をお願いします。

× × ×

図書紹介



『マナスル西壁』
一九七一年
公式報告書

小原和晴編
高橋善数

この本が出版されて少し経ってから神宮外苑の日本青年館で出版記念会があった。ABC順を逆さまにしたらし私が発起人の筆頭に印刷してあったため、最初の挨拶に小生が引張りだされてしまった。

私の嫌いなものには、いろいろあるが、精神的には関係のない羽田の送り迎えとか、人迷惑なつまらない宴会などと共に、この形式的なお義理での出版記念会というのも大嫌いなもの一つである。

しかし世の中というものはそう自分の我侘ばかり通しっぱなしにすることも出来ないことがあるし、心から出席したいと思う時もあるたまにはある。今度のテル隊の公式報告書の場合はそうした数少ない最後のカテゴリーに入るものである。

ただし私はその時の挨拶で、この本は大きさと厚さと重さをみただけで、まだ中味は読んでいない。したがってここでは内容のことは何もいえないが読んで気に入らない場合があったら徹底的にやっつけるから覚悟しておいて貰いたいと述べておいた。本というもの、体裁よく褒めるばかりが能でもってばならないからである。本の紹介をするにについてはまだいいこと、多少あるが、今回は以上で本題に移ることにしよう。

マナスル西壁初登攀の意義については、テルさんが私的に書き、文芸春秋からだしてもらった『マナスル西壁・鉄の時代のヒマラヤ』に、私のがらでもない序文があり、その中に述べてあるのでここには繰返すまい。

とにかく、「マカールの南東稜」とともに日本のヒマラヤにおける登攀技術その他の高水準を示すものとして世界的に認められているということは何よりも嬉しいことであり、それを精根を尽したギリギリ一杯のところではいえ、登頂を無事になし遂げた隊長ならびに隊員の努力と協同の精神に對しては、深い敬意と感謝の意を表せずにはいられないのである。

裏ばなしを聞くと、本の纏めは高橋善数と、小原和晴の両君がやったらしい。田中基喜君と共に頂上へ登った小原君の如きは、普通なら参加するために会社を辞めるのだが、彼は帰国してからこの報告書を作るために勤めを放棄したといっている。少なくとも空前で常識外の出来ごとであろう。善数君も私の好きな好青年だが、これを仕上げるとすぐパリへ行ってしまった。パリと山とは関係がないのでなしに行ったのかは知らないが、奥アマゾン探検隊本部に訳のわからない電報をよこしてから、葉書はニューヨークからきた。つかみどころのない男である。

だがつかめないのはこっちの腕力と知力が足りないのだから、それをつかんでくれるテルさんは矢張り隊長の資格が充分にあるのであろう。いずれにしろこ

方針 新旧会員の親睦

支部との懇親
定例会 集委員会 毎月第一月曜日
連絡来室日 毎週月曜日
定例小集会 毎月二〇日

年間計画

第三〇六回 五月二〇日(月)
カンジロバ(北里大) 河村栄二
第三〇七回 六月九日(日)
中部地区支部懇談会

第三〇八回 六月二〇日(木)
エレスト南壁 湯浅道男

第三〇九回 八月三〇日(金)
ヤルカン(日本大学)
島海昭二郎

第三一〇回 九月一〇日(火)
ジャヌー(成城大)

第三一一回 九月一五日(日)
支部との親睦

第三一二回 九月二〇日(金)
マナスル(女子) 黒石 恒

第三一三回 一〇月二〇日(日)
丹沢沢登り集中

第三一四回 一一月二〇日(水)
集委員会懇談会

第三一五回 一一月二五日(日)
モチツキ

第三一六回 一二月二〇日(金)
忘年会

第三一七回 一月一四(火)、
一五(水)

スキー親睦会

第三一八回 二月二〇日(木)
グルジャ(青山学院) 戸張至聖

青年懇談会会員各位へ

日本山岳会の中に位置する青年懇談会も設立以来満三年を迎え、その名声も次第にたかまってきたように思います。われわれ青年は、とかく保守的にな

りがちな会の中に新風を吹き込み、よりスマートな、より楽しい会の発展につくさねばならないと考えます。今年新しい委員も加わり、青年懇談会を楽しく有意義なものにしようとするが張り切っており、親睦的な会であることはもちろんよりためになる発展的な会にすることを意図しております。

皆、山を愛し、メンバーからヒマラヤへ、カラコルムへ、アンデスへ、また日本の楽しい山へ、多くの参加することを望んでいます。今後とも諸兄のご協力を期待しております。

(昭49・6・24)
日本山岳会青年懇談会担当理事 大倉昌身

青年懇談会活動予定(七四年度)

7月6日(土)講演会(講師横有恒氏)
23日(日)委員会
8月11・18日(日) 沢沢現地集会(集委員会と共催)
17日(土)18日(日) 上高地山岳研究所を使用

9月10日(火)委員会
24日(火)カラコルム・ヒンズークシュ研究会
(講師 吉沢一郎氏)

8月末日までに広島三朗氏を中心として参考書作成

10月8日(火)委員会
20日(日)丹沢現地小集会(集委員会と共催) 丹沢沢登り集中

11月12日(火)委員会
26日(日)会例(未定) 青年懇談会委員の希望により開催

12月10日(火)委員会
24日(火)青年懇談会創立記念忘年会

1月7日(火)委員会
14日(火)・16日(木)スキー懇親会

(集委員会と共催) 八方
尾根

28日(火)委員会
2月11日(火)委員会
25日(火)海外遠征裏話
3月11日(火)委員会
25日(火)プータン研究会(講師末定) 中尾佐助氏か小方全弘氏。2月末日までに研究会用参考書作成

朝日新聞社寄贈
(1)『深田久弥山の文学全集 IV 瀧酒なる自然』昭和49
東京芸術大学山岳部寄贈
(1)『73夏山剣岳合宿遭難報告書・追悼』昭和49
岡山俊雄氏寄贈
(1)岡山俊雄著『日本の山地地形と水河問題研究小史』古今書院 昭和49
定期刊行物受入報告
【部報・会報】
(1)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No.85 (49-6)
(2)『こころの山岳会月報』No.154 (49-6)
(3)日本地図資料協会『古地図研究』No.51 (49-6)
(4)国立公園協会『国立公園』No.294 (49-5)
(5)京都山岳会『京都山岳』No.590 (74-6)
(6)『明峰山岳会会報』1974 No.1/2
(7)長野県山岳協会『山岳協会』No.34 (49-5)
(8)東京野歩路会『山嶺』No.530 (49-6)
(9)日本自然保護協会『自然保護』No.144 (74-5)

図書室便り (昭和49・6)

編集の方針ならびにその内容は立派なものでもなにもいうことはない。字数の割には誤植は少ない。ただしほとんどの同じ写真が二枚ある。「ピムタン」の「マナスル」だが、これのカラーは昔のアルプス登山記にある水彩画のような趣きがある。

最初に大きな養骨を威勢よく振り上げてはみたものの、そのやり場がなくなつてしまつた。竜頭蛇尾だが四枚というのでこれで紹介を終える。

昭和四十九年一月 日本マナスル西壁登攀隊発行 二百ページ 頒価三千円(74・4・29記 吉沢一郎)

日本の山地地形と水河問題研究小史

著者の岡山理化学博士は、本年三月、明治大学を定年退職された地理学者である。本書はこの退職を記念して出版されたもので、著者の旧稿から適当にえらばれたものが本書に収録されており、日本の山地地形と水河問題研究小史の二部にあつては、百篇以上

登山してまのあたりに見る山ひたや山肌の詳細な形ではなく、地殻の内部からのたつきによって生み出される大規模な地表の起伏、形態として、山地を巨視的にとらえて論じてあり、内容は地形学の専門書に属するものである。

水河問題研究小史の第二部には、著者が寄稿された「山岳」第六十三年(昭和四十四年)の「Wウエストン日本水河遺跡論と明治十年代の水河存在論その他」および「山岳」第三十年第二号(昭和十年)、第三十一年第二号(昭和十二年)の「本邦水河問題研究の回顧」(上)(中)の全文が収録されている。後者の水河問題研究の回顧は、昭和十年九月の日本山岳会小集会上における講演内容をもとにまとめ、「山岳」(上)(中)の二回にわたって寄稿されたものであり、著者は当時、(下)の内容についても構想をもっておられたようである。本書の追記で未刊の(下)の要略が述べられている。

著者はかつて山にとりつかれていた時期もあつたようであるが、水河地形の研究にふみ出したとたん健康をそこなわれ、フィールドワークよりもむしろ理論的研究に重点をおかれたようである。水河問題研究小史では関連の研究成果について、きわめて公平、客観的な展望を試みられている。

十九世紀末から第二次大戦前までの日本における、いわゆる水河論争は、その内容が比較的平易であり、舞台が高山であるため学界のほか、前記の日本山岳会小集会の講演会にも見られるように、登山界でも大いに関心させられたのである。戦後から今日にかけての水河地形研究は、地誌的なものより、水河地形の規模、様式の研究にむけられ、かなり難解になつてきた。

岡山氏は水河問題研究回顧(上)(中)の執筆にあたっては、百篇以上

前半にあつては、百篇以上

10 東京都山岳連盟『都岳連通信』

(49-5) 日本山岳協会『登山月報』 No.60 (49-3)

(12) 日本登山協会『山之雪』 No.193 (49-6)

(13) 『淀川山岳会報』 No.2 (49-6)

〔雑誌〕

(1) 『ブルー特集尾崎喜八』No.196 (74-6)

(2) 『岳人』No.325 (74-7)

(3) 『岳人別冊(4)の夏山一』

(4) 『山之溪谷』No.430 (74-7)

〔その他〕

東京都山岳連盟寄贈

(1) 『春山気象報告書』48.4.28~5.6』昭和49

尾崎喜八氏寄贈

(1) 『ブルー特集尾崎喜八』No.196 (74-6) 創文社

城内睦夫氏寄贈

(1) 白峰北夫著『山に生かす』【昭和49】

日本エニスト登山隊寄贈

(1) 『日本エニスト登山隊一九七三』

報告書』昭和49

深田久弥文学碑建立委員会寄贈

(1) 山下久男編『深田久弥の幼少年時代』昭和49

〔海外雑誌〕

1. 『Die Alpen』N.3. April 74.

2. 『Alpinismus』74-5.

3. 『Der Bersteiger』74-4.

4. 『Climbing』May/June 74.

5. 『Federacion Española de Montañismo. Anuario』1973.

6. 『The Geographical Journal』Vol. X 140, part. 1, Feb. 74.

6. 『Mountain』No.33, 34, March, April 74.

8. 『The New Zealand Alpine Journal』Vol. XXVI. 1973.

9. 『Österreichische Alpenzeitung』91. Jahrg. Folge 1394.

März/April 74.

10. 『Österreichischen Alpenvereins. Mitteilungen』29. Jahrg. Heft 3/4. März/April 74.

11. 『Rivista mensile』Anno 94, N. 12. Dicembre, 73.

12. 『Sierra Club. Bulletin』Vol. 59, No. 3, 4, 5. March, April, May 74.

ルーム日誌(49年6月)

3日(月) 集委員会

4日(火) 図書委員会

5日(水) 明治大学O.B.会

7日(金) 理事会

10日(月) 学生部

11日(火) 書評委員会

12日(水) 青年懇談会

14日(金) 評議員会

15日(土) 自然保護委員会

19日(水) 学生部

21日(金) 山日記編集委員会

24日(月) 自然保護委員会

25日(火) 青年懇談会

婦人懇談会

六月中米室者 四〇五名

訂正 会報三四八号一頁昭和四十九年度除籍者氏名中、四二二一 東芝山岳会、七二二七 小泉義和、六八五九 西嶋 恵、二二四七 藤平正夫とあるを取消す。

会員異動

終身会員(49年6月)

二二六四 橋爪幸達

支部便り

越後支部の還暦を祝う会

鈴木敏雄

何もしない越後支部会員は幸い良き先輩にも恵まれ、今なおかくしゃくとわれわれ若輩の先達となり厳冬の山稜に遊び、酷寒の峯々で、わが人生を語り、こよなく友を愛し、先輩、後輩の別なく口角泡を飛ばして岳を論ずる支部の大先輩で後継の指導育成に惜しみなく寸暇を惜しみ、足跡をこの越後の山野に印し残した温厚篤実な会員、佐藤金一、佐久間淳一、花井馨、山岸栄三郎、奥津五郎の五氏があたかも今年齢六十となり、また日本山岳会の大先輩、高頭仁兵衛翁の寿像を掲げてから二十五年、越後の志を同じうする岳人が翁の功績を永遠に記念する年でもあり、五氏の還暦を祝して、越後一之宮の麓、三島郡寺泊町野積、真言宗智山派 西生寺 弘智法印において益々の寿福を希い若葉薫る六月十五日盛大な賀宴を催した。

広く県下から参集した支部会員六十数名、岳友、酒友あい一堂に介し、あい集い、夜の明けやらぬのも忘れ友を肩に車座となつて心からなる祝杯を重ね、醒めやらぬ翌日早々弥彦山頂大平の峯に高頭仁兵衛翁の碑を尋ね寿福の五氏を囲み、眼下新緑の越後平野からはるか越後の連山を仰ぎ、日本海の荒波に浮ぶ大佐渡、小佐渡の山波と三百六十度の鳥瞰を欲しいままにし、高頭仁兵衛翁の追憶と、つきぬ話に、花が咲いて、時の立つを忘れた一日であった。

集会係の鉄舟寺集会に想つ 山本朋三郎 日本山岳会会員とは、どのような人

の論文を熟読し検討を重ねられ相当の労力をはらわれたようである。同氏は(下)の未刊のことについて日本山岳会に対して、たいへん負い目をいだいておられるようであるが、私は、岡山氏が気軽に書いて片づけてしまつたような態度を守っておられることに對して敬意を表したい。

本書の最後には今村学郎著「日本アルプスと水期の氷河」(岩波書店、昭和十五年)の書評があり十一ページにおよんでゐる。岡山氏は今村氏の論述を「白でなければ黒という快刀乱麻的の直截さと灰色的なものは一切これを拒否するという厳格さをもつていちじらしい特色とする」と評され、日本アルプスの氷河地形について体系化された内容を要領よく要約して紹介されている。また、随所に見られる論述上の

穂高涸沢 Tent 集会

恒例の穂高涸沢集会を左記要領により開催いたします。青年懇談会例会を兼ねて行われますが一般会員およびお知り合いの方々への参加を大歓迎いたします。

また八月十七日夜は上高地山岳研究所で大コンパを開くことになっております。記 是非ご参加下さい。

場所 穂高涸沢 JAC・ベースキャンプ

期日 八月十一日、十七日

(十七日夜は上高地山岳研で懇親会)

参加者 宿泊料 一人一日五百円

△テント持参品 米 一〇・五キロ

×宿泊日数、食器二個、シユレフ、その他宿泊準備類

△申込先 文京区湯島1の6の1さくらビル日本山岳会青年懇談会涸沢集会実行委員会

疑義には、根拠をあげて指摘されている。今村氏のこの本は、古本屋ではめつたに見つけられないが、この書評を一読すれば大体的内容をつかむことができよう。しかし、岡山氏は書評の末尾に「読者はこの小文によつて本書の内容を速断されることなく、親しく本書をひもとかれるよう、切望して筆をおく」と結ばれている。なお、この書評は「地理研究」第一巻、第二号(昭和十六年)に掲載されたものである。私自身、三十年以上もとりだして読んだこの本を、ときどき、とりだして読んでゐるが、何度読みかえしても興味はつきない。現在にいたるまで、この類書は一つも発行されていないようである。

昭和四十九年三月 古今書院発行 本文二四六頁 二、五〇〇円 (原田之幹)

第七回図書交換会(図書委員会)

恒例の図書交換会は、十月十九日(土)にきまりました。毎回、多くの会員諸氏からご協力をいただいたてまいりましたが、本年も多数ご出品くださいますよう、不要の図書を交換できるものを準備くださるよう、よろしくお願ひいたします。出品締切りは九月二十八日(土)といたします。交換会への参加は会員に限らせていただきます。

訂正とお詫び 本誌三四八号

「秩父宮仁雅親王」同八行目「上高地」はそれぞれ「秩父宮雅仁親王」「上高地」の誤りにつき訂正いたしました。

この件につき宮家はじめ筆者の成瀬岩雄氏、会員各位に多大なご迷惑をお掛けしたことを編者として深くお詫び申し上げます。早急、関係各位ならびに保存用にはこの部分の刷り直しを致しましたことを報告申し上げます。(編者・小倉記)

違なのか、皆、立派な登山愛好者であり。大自然の中に飛び込んでみて、人間という小さな生き物であることを、自覚、あるいは薄っすらと感じた男女で構成されているという人がいる。これらの人達が会費をだし、JACのバッジを通して会員意識をもっている、

口やかましい人達が多いから、会の役員、委員はコキ使われるというが、社会的に立派な方々が会の運営育成に努力していただいていることは喜ばしいことである。しかし、あまりにも立派な方々でありすぎ、若い声、地方の音が少々影が薄くなってしまうとはいかない。

過去の日本山岳会の輝やかしい、日本の登山界における、リーダーシップが全国にあまねく行きわたってすでに半世紀以上たっている。昔は昔、今は今だ、そういう声もする。それくらい、日本山

岳会は大きく、日本の登山界を育ててきた。

戦後の良きに、悪しきにつけて一つの行き方として、数を集めて声とし力とする方法が、政治にも、社会にあまねく行き渡ってしまった。小数の、泥くさい頑張り、数々大多数―大衆―の中にアップアップして自沈する。そして自沈する泥くさい意見をもった者を見捨てて致し方あるまい、との一般的な態度である。

地方の泥くさい意見、青くさい若者の意見も大いに聴聞して良きは取るの積極的な、会の運営展開を切に願うものである。あまりにスマートにすぎると息を切らせて行けない者もいる。

地方から、あるいは若い層から声がないのはスマートでなく、次代の後継者の欠けて行くことであってはならない。

大いに地方、あるいは若い者の意見を採用すること、若い役員、委員を増やすことは、必ずしも一致しない。

若い者ばかりでは物事が進まず、活力の空転することが多い。蒸気機関車に例えれば、若いエネルギーの石炭のたきすぎは危険である。上手に運転する常務理事会の腕と経験に大いに期待するものである。(49・6・12)

第十七回紅葉会のお知らせ

▼期日 十一月九日―十日

▼集合 九日午前十時半 静岡市役所前時間厳守。貸切バスにて二軒小屋(途中乗継)

▼宿舎 二軒小屋 東海パルプ山荘 懇親会 午後五時―八時

▼翌日山行

▼A班 転付峠越え新倉(リーダー山梨支部山村正光氏)

▼B班 大井川鉄道井川駅解散。途中

接阻映を見ながら千頭、金谷へ。なお希望者は途中、寸又峡温泉、大鉄山の家(泊(実費))案内する

▼参加金 五千円。(静岡―井川、井川―二軒小屋、二軒小屋―井川間乗物代金、山荘使用料、夕食運営雑費を含む)

▼持参品 寝具はシツ付ベットであるから不用。防寒衣、懐中電灯、九日昼食、十日昼食は必ず携行されたい。山中ゆえ用意出来ず。

▼本年は南アルプス奥、二軒小屋に東海パルプKKが一億余円をかけ、カナダ視察を基に四階建の山荘ができました。当行事のため、特別に貸切りで使用させていただくことになりました。

静かな二軒小屋付近も、本年が最後ではないかと考えられます。原始林に囲まれた、いたりつくせりの快適な山荘で、山の諸先輩のお話を聞き、魔道にされる転付峠を翌日歩きます。地元会員も参加し収容人員が五十二名ですので、東京方面の会員は三十名くらゐで締切らせていただきます。申し込みは会員番号、年令、電話番号、住所明記して静岡支部宛前納金二千円同封のうえ申し込み下さい。

第五回山岳図書を語る夕べ

左記より恒例の山岳図書を語る夕べをひらきますので、ご参集のほどお待たせしております。

日時 九月十八日(水)午後六時より

講師 望月達夫氏

場所 本会ルーム(図書委員会)

お知らせ

六月十日から、日本とブライタン王国ならびにシッキム王国間に国際電報取扱サービスが開始されました。料金は通常電報一語 一三二円 新聞電報一語 二五円